たより
『美紗の会』ニュース
第44号
平成十五年八月二十六日
発行者
「美紗の会」
☎03-3441-2726
編集責任者
大久保　朋子

忍ぶ恋路と葉隠と

西松布咏

「忍ぶ恋路は、さてはかなさよ、今度逢うのが命がけ、汚す涙のおしろいもその顔隠す無理な酒」

「ひとり酒場で飲む酒は、別れ涙の味がする、飲んで捨てたい面影が飲めばグラスに又浮かぶ」

どちらも苦しい恋の唄である。

「忍ぶ恋路」は江戸時代の歌沢で遊郭に身を置く遊女の切ない思いを唄っている。

苦界の女は好きな男とたまに逢えるだけが生きる支え。でもそのひと時が過ぎたら今度はいつ逢えるのやら、その涙を見せまいとそっと顔を袂で隠し無理に盃をかさねたのだろう、、今と比べ想像を超えた時の重み、心の極みである。

七月半ば身空ひばりの追善番組を何度も観た。

唄の主人公になり切り空を舞う蝶のように自由自在に言葉を操る完璧な唄のうまさにただただ脱帽した。しかし「悲しい酒」を歌う時だけはマイクを両手で握りしめ憶面もなく流れる涙の海に沈む一人の女になった。きっとこの時だけは歌手のひばりではなく「加藤かずえ」でありたかったのだろうと彼女の強さと女の哀しみを見た。

こうして江戸の女も今の女も涙しながら生きてきた。

唄は極度に節約された言葉だからこそ逆に限りなく大きな心理的空間や長い時間の記憶がよみがえり時には自分の思いと交差する。

だからこそ唄は心の故郷として生き続けてゆけるのだろう。

七月末に金沢を訪れた。この秋泉鏡花記念館で開かれる森田拾史郎氏の写真展《鏡花の世界》の記念イヴェントの打ち合わせの為に。

私は十月十一日に《瀧の白糸》と《歌行燈》を弾き語りすることになった。

「義血侠血」の主人公白糸は天神橋で出遭った村越欣也を検事にする為旅から旅の水芸人になって仕送りを続けるけなげな女。客の前では笑顔を見せるが夜になると橋のたもとで逢いたい心が身につまされてひそかに忍ぶ涙を流しただろう。

《歌行燈》のお三重も能楽師の娘でありながら数奇な運命に弄ばれて芸者になったが芸が出来ない辛さに忍ぶ涙を流した。

記念館で音合わせをした帰り水芸白糸の銅像が佇む浅野川のたもとで静かに暮れて行く逢う魔刻に鏡花の世界に思いを馳せた。

鏡花は九才の時に母親と死別した為女性への思慕はことさら強く時には幻想的にシヴァ神のように化身する美しい女を様々な角度で描いた。

「わが恋は人とる沼の花あやめ」と恋師には我が身の命もいらぬと恩師の尾崎紅葉に猛反対されたにも拘わらず芸者すずと所帯を持ち恋を貫いた人生だった。

光と闇。意識と無意識のあわい。日常と非日常の時間的境界がいったりきたりの。。。

八月のある日稽古に来た弟子が松岡正剛氏の書く《千夜千冊》「葉隠」に師匠のことが書かれていますよ。と教えてくれた。

《武士道》と《江戸の唄》にどんな因果関係があるのだろうか？と一瞬不思議に思った。

武士道というは死ぬこととみつけたり。の裏に《忍ぶ恋》が潜んでいたとは…

恋の至極は忍ぶ恋にあり。究極の恋は相手に恋心の負担を感じさせてはいけないと。

恋死なむ後の煙のそれと知れ。終いにもらさぬ中の思いこそが真実の恋であり、主従の間もこの心であり続けるべきだと。なんとも壮絶な恋の定義である。

そう言えば歌沢の「玉川」にこんな一節があった。

高尾太夫が思いを寄せる男への文からとった「思い出さずに忘れずに又来る春を待つぞえ」三味線によって紡ぎ出される女の多くは歌舞音曲で男を慰め色を売ることを強いられたが音楽と舞踊の芸術家でもあり一般の家庭婦人と比べ恋愛の自由があった。

しかしその恋は常に来るべき別離が付随していた。だからこそ焦がれる涙は奥に秘め心の結界を引き相手に負担を感じさせないでさらりと思いをにじませる。

これこそ伊達を生きる女の心意気であり武士道に通じるのかもしれない。

武士道とは死ぬことと見つけたりかもしれないが女の芸道は忍ぶ恋を生き続けなければならない。もしかしたら山本常朝の《葉隠》より難しいことかもしれない。

手のひらに舞い落ちた雪はさらさらとして掴もうとしても静かに消えてゆくように…

『三十石船と伏見』端唄「淀の川瀬」考

橋本直樹

今春八芳園での演奏会で河北さんの端唄「淀の川瀬」を聞いて、うまいな、いい唄だなと思った。それが誘いの街へ行って見たいと思った。

三十石船のどこかなあ。

いうのは大阪から京都へ旅客専用に運ぶ船で、伏見はその船便の京都側の船着場である。大阪から淀川を遡って来て、客を通過した船が伏見で迎えると、客はどっと下船して客引きにつかまったり、旅籠あやしい男が足早に消えたりして、賑やかなことだったろう。そうした伏見を現地に立って思い描いて見たいと思ったのだ。

端唄の曲趣と伏見の土地柄を味わうために、こと三十石船が航行するに川筋のおさらいから始めたいので、ちょっと地図を思いい願いたい。

琵琶湖の南端から流れ出た清流は、はじめ瀬田川といわれるとが、西流して京都府に入るとが宇治川と名が変る。宇治の茶の里、平等院のそばを流れ過ぎ、伏見を流れるときも宇治川である。伏見を過ぎて少し西南に下ったところで来たから流れて来た桂川と合流し、川とも合流する。これの二つの合流のあたりの地名が唄にもある。合流で大河となった淀川である。鉄道のない時代、二大都市大阪と京都を結ぶ運輸は淀川を上下する船便が主力で、特に旅客専用は早登り三十石船という特別の船が朝夕二便定期があった。今して朝日の新幹線みたいなものだった。

こいですぐ思い出すのは広沢虎造の浪曲「石松三十石船」だ。森の石松が親分清水次郎長の代理で讃岐の金毘羅参りを済ませて帰途大阪に立ち寄り、その活況ぶりに驚いたあと

「……待てよ、いぶし小道いがあまってんな、こいぶし小道」

伏見へ渡って石松は、京都見物して、それから清水へ帰ろうかな」

と独りごとをいいながら大阪の八軒屋から船に乗る。船が沖合いにでると知らぬ客どうしが話し始めて、やがて街道筋の親分衆の噂さ話に花が咲き、ご存知「子だくっねえ酒のみねえ、江戸っ子だくっねえ酒のみねえ、だこっちへ寄んねえ、小道いのやろうか」の一段となる。

話はかわるが、英国の外交官で幕末維新時期に日本に滞在して貴重な記録を残したアーネスト・サトウがこのルートのことを書いている。

慶應三年、外人が誘いの大阪から江戸までの陸路を行く冒険的旅行をしたその出発で、彼は朝九時にこの宿舎を出発で、八軒屋波止場で田舎港、昼食をとろうとするが白い御飯と豆腐だけでのどを通らない。六時頃、旅の査証に不備があめたら淀で、旅の査証に不備があめたら淀で、旅の査証に不備があめたら淀で、伏見に着いた。そこから駕籠に乗って、右手に宇治茶の畠を見ながら進み、追分（大津の西）で東海道へ出た、と書いている。

こういう位置だから、維新回天の志士坂本竜馬が東奔西走の足場としてて伏見のことの寺田屋らしい合理的な選択であろう。

行ってみるとの寺田屋の当時の、まま残っている、竜馬や薩摩藩士にゆかりの部屋など隅々まで見せてくれる。お竜さんが風呂場の窓からふと外を見つつ、幕吏が迫っている駆けて上って、竜馬に知らせて逃したという、その風呂場も階段もある。裸のまま、というのは勝手なる想像だが。

寺田屋の前の川は宇治川の奔流ではなく嫁水だが、三十石船はこいまで入って来たそうだ。三十石船を称する遊覧船が観光客を乗せて回遊している。

伏見へ行ってみて初めて知ったのだが、御香宮（ごこのみや）という立派な神社が京都の鎮守、本殿は水戸頼房は紀州頼宣、表門は家康、拝殿は秀忠の寄進になるものだし、社務所裏には初代小堀遠州作庭の石庭がある。徳川家が政権安定のためにこの地元の神社を厚遇しようとしたのだろう。そう云えば秀吉がつくろう。伏見城を家光の代に破却したのも豊臣色を払拭する狙いがこもっていたと思われる。

この神社の境内に平安時代に香りの良い水が湧き出た。そのの奇瑞によって清和天皇よりの「御香宮」の名を賜った。御香水は今も湧き出ていて誰でも飲んだり汲み取ったりできる。環境庁選定の名水百選のひとつだそうな。

これは豊臣伏見というところが良質で地水に恵まれていると酒造ほか老舗の酒造があり、灘と並び称せられる酒どころだ。であるのも道理だということだ。

新幹線の改札口を出ると目の前に近鉄の乗り場があって、切符売場は自販機でなく、駅員がちゃんと目的地に近い駅などを教えながら切符を売ってくれるのが気持ちいい。そこから快速電車で二つめ、その桃山御陵前駅でおりると、その辺りが伏見のまちだ。

因みに桃山御陵とは、京都がのお明治天皇の御陵だ。好きだった明治帝は、東京ではなくここでお眠りているのだそうだ。

さて端唄の曲趣に戻る。

大阪を出て淀川を遡る間は、「高い堤の間を流れて いるのを見て、広い山脈の頂きのほかは、跳めが少しもさかなかった」

「アーネスト・サトウ」という風景で、客は景色よりも飲食とおしゃべりに気をとられていたが、淀を過ぎて宇治川に低く、あたりの風景が手近に見えるようになる。おしゃべりにもあきた乗客達はもうすぐ伏見だという安堵感もすよ、ほら水車が廻っていますよ、あの松の木の姿はいい、早いなどと語り合う。気の船頭さんも今一息とばかりに、張り切って、岸の船見き人夫よいかけ合いよいと声を唄ったのが「淀の川瀬」であろう。るいよいよいと声をかけ合いよいと声を唄ったのが

舟旅に誘われそうになるコマーシャルソングではなかろうか。甘口の上ったお客様をくいと民謡口ひっかけて、威勢よく民謡の気分をこめて唄いたいものである。（おわり）

今後の予定

九月七日（日）NHK青山荘

あじさいの間　午後一時

第二十六回美紗の会

ゆかたざらい

九月十四日（日）

池上本門寺

午後五時

吉村ゆきぞの舞の寺小屋

地唄舞　虫の音　吉村　松韻

秋によせる唄　西松　布咏

十月四日（土）

青山鎮仙会能楽研究所

第一回　午後六時半

玄　地唄と舞の会

舞　古沢　侑峯

能管　松田　弘之

十月十一日（土）

金沢泉鏡花記念館

森田拾史郎写真展

記念企画イベント

新内「滝の白糸」

創作曲「幻のお三重」

十月二十五日（土）

新潟　鋼茶屋

午前十一時

秋を味わう　文弥人形

西橋健師と共演

十月二十六日（日）

国立小劇場

十二時

坂東由紀乃丞の会

地唄　ゆき　水鏡

時空をゆく屋形船「シルクソウル・たなばた」

川崎　隆章

七夕間近の夕暮れ時。舞台は新富町・三吉橋のたもと。お祭り、なんだかこうまぶたがけでワクワクしてくるではありませんなあ。

そんな思いのなか、七月四日夕刻、新富町駅下車・中央会館至近・亀井橋公園向井の和食のお店「素処（そこ）」で布咏師匠の独演会「シルクソウル・たなばた」が開かれました。

「素処」はCD「クレッセント・ムーンブルース」や「ニュアンスの会」に関するデザインを御願いした山口謙次郎さんがご亭主で、そのご縁でこのライブが開かれたというわけです。

この日は梅雨入り直前で気温が高かったのですが、この一帯だけは涼しい風が吹いていて、案外爽やかでありました。

会場のジェネスシティ街のまったく「素処」はなかでも旬の食材を食べさせてくれる、シックな造りの和食料をメインとするお店。内装もシンプルで生成りの材料を用いており、「店全体の雰囲気が高めの存在を引き立てになる」とオーナーの造りにてなるほどこりゃあライブをやるにはもってこいの場所でした。

せっかく風が心地よかったので受付をお客さんの外に設けました。しかし、私はうっかりありました。夕凪です。気付いた時は既に遅く、お客様が次々にお見えになり、受付を動かすことも難しくなってゆく。全くゆるゆる弱くなってゆく。

の不勉強でした。

そろそろ日も暮れて七時すぎ、師匠が高座へ。この日の高座は実は宅で普段使われている調度を工夫して、綺麗な使い方をしていたという即興作品。しかし照明の具合となりまって古風でいい感じになりました。惜しむらくは蝋燭で高座に紅い蝋燭を対で備えつけた場所ですが、高座空調の風の通り道にあたるもので防火安全上の見地からありました。これはお客様も残念がっていたようで、終演後「のロウソクで聴きたかった」という声があちこちから聴かれました。

演奏会の始まり、そしてお馴染み「縁かいな」。

幕開けの序奏、そしてお馴染みいつつ思うのですが、この短い序奏からゾーン曲日へ橋架かりい感じにクゾクします。聞き手の心中の華やいだ気分。つぼんでいた花がゆっくりフワッと開いたような感動を覚えました。

余談になりますが、新富町から地下鉄有楽町線でちょっと走ると終点の新木場。ここは都立の熱帯植物園がありまして、年に何回か、夜開くく熱帯の花を見せてくれます。夏の花が開くときは実に艶っぽい情念の明かりの下、さまざまな形をしたつぼみがフワッと開いてゆく。この時、中から甘く心を溶かすような香りが匂い立ちます。そんな事を思い出す唄いだしでした。

「今回は屋形船に江戸見立てまして、ご一緒に江戸時代によういただけたらと思います。きょうは七夕にちなみ思いします。恋の唄やいろいろと切ない唄もうたってゆけたらと思っております」と軽いご挨拶。続く二曲目は「忍ぶ恋路」。苦界に身を沈めながら流す辛い涙を隠しているいう唄にはは布咏師匠はいる、といい唄にるようで、美空ひばりが「悲いに酒」を歌ったあと、万感の想い突き上げられて涙を流した、とエピソードを重ねて合わせながら、語っておられました。

三曲目からは小唄に切り替えて。まずは会場の土地にちなんで「新富町河岸」。

数ある江戸の河岸の中でも役者とファンの恋の舞台でもあった。

「昔は芝居茶屋が多くあったなぁ」と偲ぶのがこの唄のお客さまには市川亀次郎さんがはもいらっしゃいました。

さすがはも新富町でもあり、恋の思い出。自分にだけは格別なランドマークがあって、それに触れると、ちょっとと痛いような、ちょっとくすぐったいような、あるいはちょっと心が締め付けられるような感じとも、時間が遡ります。いや、遡るのうちはまだ思い出鮮やかな記憶は一枚の叙情画に収まってゆく。師匠は鳥森に通っていた時の、その鳥森を披露してくださいました。

馴染みの夏の唄で「夏の暑さ」。お つづいて「お盆」。

「夏の唄すが替え歌趣向。まぁ、恋は季節を問わずアリ。聴き較べ。そして「対浴衣」。男性陣来をこと、さらグッとさせる名曲。

「せめて」。

「しの対浴衣」の「せめて」。

「のあたりが特にチクチク。次は「晴れて雲間」。「蚊帳が吊ってあって…枕がもやい枕」と言ってあって…二人で寝られるよ」などと、「なんですが」。

この唄の恋物語を解説すると、ほこの禮しのそうな事。お客様の笑顔で「あじさいの」「廻り灯籠」とあざやかな感じの曲。

「とあざやかな感じの曲」。

聴き手も演奏者も集中度が高まり、音ひとつ越えひとつで、

「あじさいの」。

「あじさいの」。

「あじさいの」。